だより

R6.4.23　Vol.3

若さの特権

始業式の日、担任発表をしました。おそらく１年のうちで子供たちが一番ワクワクドキドキする瞬間だと思います。「やった～！とか、微妙～！(笑)とかは声に出さないように、心の中で叫んで下さいね。」と前置きした後、担任を発表していきました。発表していく中、子供たちの表情から期待や喜びが伝わってきました。「5.6 年担任、F 先生」と私が言ったとき、「やった！」「よし！」とガッツポーズする子供が何人もいました。思わず、声が出てしまったのでしょう。「若さの特権だなあ。」と思いましたが、若さだけでは子供はついてきません。これまでのＦ先生の取組が子供との信頼関係を築いていたのでしょう。若さは武器です。そして、日々の子供たちとの関わりの中で、それをさらに磨いていったのだと思います。

私にはもう磨く若さはありませんが、経験をこれからも磨いていきたいと思います。職員にもそれぞれの持ち味をしっかり出していって下さいと伝えています。どの学年も楽しい毎日になるよう見守っていきたいです。

朝の挨拶

前号で、子供の挨拶について少し触れましたが、登校の様子を見ていると、道を往来するドライバーの方にも挨拶している姿が見られ、とても嬉しくなりました。今は不審者等の問題もあり、むやみやたらに声をかけないことを指導しなくてはいけないような時もある、そんな世知辛い世の中です。が、真穴には、古き良き時代が残っている雰囲気を感じました。

行き交うドライバーの皆さんからも子供たちが見守られていること、本当にありがたく思います。素敵な習慣！これからもしっかり続けさせていきたいです。

年度当初の緊張感が少し緩んだのか、朝、中々、挨拶の声が出にくい子供もいます。体調等、しっかり見ていきたいですね。

「元気だから声が出る」のではなく、「声を出すから元気になる」という話があります。礼儀の面と共に健康面からもしっかり声を出すことを指導していきます。

四方山話真穴 ver.　其の三（時代）

「校長先生！何歳？」「うん？25 歳(^o^)」「はい！嘘ですね！本当は？」「…57 歳(T_T)」

前号で誕生日の話に触れましたが、子供にとって57歳という昭和生まれの人間はどんな風に映っているのでしょう。私が小学生の頃は校長先生と言ったら、すごく偉い人！そんなイメージでした。来年度はいよいよ令和生まれの子供たちが入学してくる年です。昭和という時代がますます遠くになりにけりですね。気がつくと、いつの間にか3つの時代を生きています。改めて考えると驚きです。

さて昭和から令和にかけて、時代はどう変わったのでしょう。いろいろな捉え方があると思いますが、人間の欲求にいかに素早く応えるか、そこに向けて大きく動いていった（動いている）時代のような気がします。

今やスマホ一つあれば、家から一歩も出なくても全てが揃い、生活できてしまいます。便利さを追い求めるという欲求は留まるところを知りません。どんどん快適になる生活ではありますが、気をつけておかないと大きな落とし穴にはまる気がします。**「便利になる」**ということは見方を変えると**「動かなくてすむ」**ということです。

生き物である人間が動かなくなるということはある意味「死」を意味します。さすがにそれは極論かもしれませんが、動かなくてもいいということは生き物にとって、あまりいい影響があるとは思えません。

特にこれから心身が発育していく子供たちが便利さにどっぷりはまるということには何か危うさを感じます。あえて不便な生活をする必要はないのかもしれません。が、「不便だからこそ、自分の頭で考え、自分の身体をしっかり使うようになるのでは？」と考えてしまうのは、最早、昭和人間の世迷言でしかないのでしょうか？（苦笑）